



弁護士 松倉 香純 (78回)

先輩から後輩へ
皆さんは今どんなことに興味がありますか。勉強のこと、部活のこと、友人関係や恋愛のこと、進路や受験のことなど、高校3年間で考えるべきことは山ほどあり、様々なことを考え、悩みながら、日々邁進されているのではないのでしょうか。さて、それでは、「現代や未来の日本の政治や経済のこと」については、どうでしょうか。私自身の高校時代はといえば、正直あまり真剣に考えたことはありませんでした。お恥ずかしながら、漠然と、なんとなく考えるだろうと考えていました。しかし、少子高齢化による人口構造の変化や、人口減少による低成長時代の到来等により、今、社会の現状は大きく変わり、日本の社会システムには、あらゆる「不都合」が生じています。これまでの考え方が通用しない、未知の社会が到来しているようです。

例えは政治の世界では、少子高齢化に伴い、多数の有権者層が見込める高齢者世代向けの政策が優先され、現役世代向け(子育て世代や労働世代)の政策は軽視される傾向が常態化しています。そして、今後増え続ける高齢者世代は、なかなか自らの既得権益を手放そうとはしません。すなわち、現状、現役世代やこれから社会に出る世代は、この現状を放っておけば、既得権益層である高齢者世代によって、今後ひたすら「搾取」され続ける、という状況に陥ります。

ご存知のとおり、昨年の憲法改正国民投票法の改正を受けて、今年、改正公職選挙法が成立し、「18歳以上」の国民が有権者になりました。この「18歳以上選挙権」改正には賛否両論ありますが、この制度改正自体の是非はさておき、ここで最も重要なのは、この制度改正を、「どう活用するか」であると思います。

「現代や未来の日本の政治や経済のこと」について考えるということとは、遠く知らない誰かのことではない、自分や自分の子供の未来のことについて考えるということだと思います。そして、皆さんには、この社会の「不都合」を打開できる機会があります。さて、皆さんは、「18歳以上選挙権」改正を、どのように活用しますか。

先輩 往復書簡 後輩



平成27年度 前期生徒会長 深津 弥香

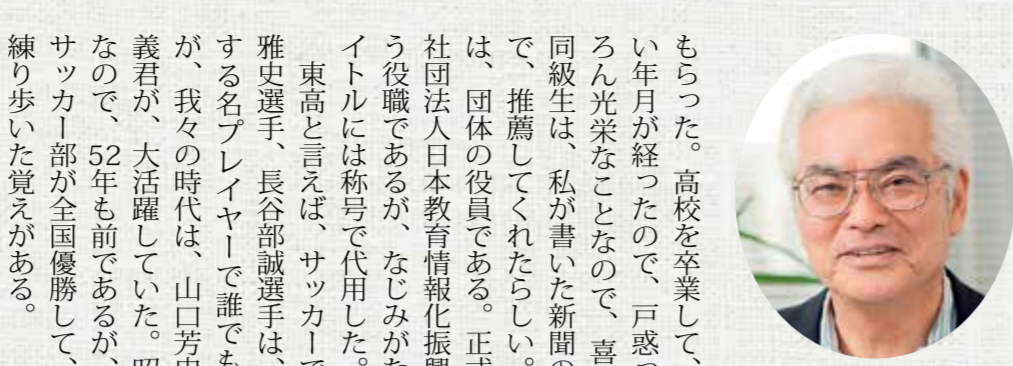
18歳以上の国民に選挙権が与えられることになりました。選挙権=成人の証、とすると、私たちが成人として十分なかはかなり不安ですが、18歳が有権者となるのは、松倉さんが言われるように若い世代が「搾取」されている現状を少しでも変えていかねばならない、ということではないかと思えます。

高齢者を社会が支えるのは当然ですが、今は若い世代への支援が高齢者に比べてあまり充実していないように感じます。たとえば、日本は大学の学費がかなり高く、経済的に苦しい家は進学を諦めざるをえません。奨学金を借りても返せない人が増えているという記事も見ることがあります。また、保育園が不足していて、子供を預けられず母親が働きに出られない状況もあります。少子化が問題になっていますが、そもそも正規雇用でなく不安定な場合、結婚すら難しいのではないのでしょうか。

大学進学、就職、結婚、子育て...どれもこれら私たちが経験していくことですが、ここにあげたような事柄に積極的に取り組む人を選びたいと、私は考えています。

さらに、戦後70年間ずっと続いてきた「平和な日本」が変えられてしまいそうな今、戦争体験者の方々味が味わった悲惨な状況をこれから再び作り出してしまうのか、今の状態を維持していくのか、決められるチャンスを与えられたと思っています。憲法9条改正の投票があるなら、私は平和を守るためにどうしたらよいかしっかり考えて投票するつもりです。

この文章を書いていて、私は自分が政治に関して知っていることがあまりに少なく、いかに選挙や政治に関心がなかったのが考えさせられました。私たちの未来は、私たちが切り拓いていかなければなりません。そのため、多くの情報を発信し合い、意見や考えを自由に言い合える環境を作ることが必要です。そして、私たちの考えを少しでも現実に変えていく姿勢が大切だと思います。私たちの一票で自分たちの未来を変えていくのか、それとも捨ててしまおうのか、私達の考えや気持ち一つです。与えられた権利を自分たちの未来のために、そして私たちの次の世代のために活用していきたいです。



東京工業大学名誉教授 赤堀 侃司 (36回)

東高の同級生から電話で、文字通り永い年月が経ったので、戸惑ったが、もちろん光栄なことなので、喜ばされた。同級生は、私が書いた新聞の記事を読んで、推薦してくれたらしい。現在の職業は、団体の役員である。正式には、一般社団法人日本教育情報振興会会長という役職であるが、なじみがないので、タイトルには称号で代用した。

東高の同級生から電話で、文字通り永い年月が経ったので、戸惑ったが、もちろん光栄なことなので、喜ばされた。同級生は、私が書いた新聞の記事を読んで、推薦してくれたらしい。現在の職業は、団体の役員である。正式には、一般社団法人日本教育情報振興会会長という役職であるが、なじみがないので、タイトルには称号で代用した。

毎年夏ごろに、お墓参りに藤枝に帰るが、東高の前を車で通るとはあっても不審者と間違えられたい怖いから、中に入ったことはない。我々の頃は、一言で言えば、自由な校風だった。たまたま気がする。勉強したいものは勉強し、スポーツをしたものは部活で、というように青春を謳歌していた。運動会で歌った古色蒼然とした応援歌「健児、ヒソクをタシシガ」で始まる歌詞は、不思議にまだ覚えていて、正確な漢字を知らない。高校に入って、初めて操縦の練習をさせられた、高校生になったという感慨があった。

東高の図書館 と私 近世女性史研究者 関 民子 (37回)

小学校6年生の時である、東高にある図書館に遊びに行きました。その時、未知の人間と対峙した。たまたま借りた本が、机の上にあるのをみつけた。開けてみると、現代版の平安の日記文学で、私も読める。その中の「和泉式部日記」を読み始めて少し進んだところで姉に見つかり、「あんたには早すぎる!」と取り上げられてしまった。天皇兄弟と和泉式部の三角関係を描いた内容を考えては、小6の三角関係はわからないと姉が判断したのも無理からぬところである。だが、中断させられた私には、続きが読みたいという思いが残っていた。それとともに、その本がある「東高の図書館」というものも記憶に残ったのである。

4年たつて東高に入学した私は、早速図書館からそれを借り出した。続きを読みた満足感だけで結局たいした印象は残らなかったが、机の上にあるのをみつけた。開けてみると、現代版の平安の日記文学で、私も読める。その中の「和泉式部日記」を読み始めて少し進んだところで姉に見つかり、「あんたには早すぎる!」と取り上げられてしまった。

世界に愛される 藤枝東卒業生 丸石 秀和 (56回)

丸石 秀和 代表取締役社長 大石 秀和 (56回)

人生生に比べ、教科書を読むのに3倍以上の時間がかかったし、エッセイの2乗を英語でなんと言ったのかも知らなかった。それでも東高卒業生の学習力でコロラド州立大農学部を卒業し、帰国した。今は家庭で養鶏を継いで、仕事に励んでいる毎日である。

在学当時の藤枝東は相当自由な校風があった。私はビー・バップ・ハイスクールのようなイチャイチャで通っていたが、服装については先生方から指導を受けた覚えはない。勝手確なまなぶ雰囲気の中に、先生方からの確かな御指導もあって、勉強+部活+応援団活動に励み、素晴らしい友人たちと様々な人間関係を創りだす過程を経験した。これによって異国のデイベンディを許容する基礎能力が培われたように思う。異国の習慣を受け入れるには、型にはまらない発想力が必要だ。人種差別に勝つていく心強さもあって、自慢ではないが、アメリカに5年も居て、一度もマリファナを吸ったこととはない。高校時代に確立できた自分自身のアイデンティティが異文化の中で生き抜く糧となった。同窓会でお会いした海外生活を経験している皆さんも同じようなことを感じたいと思う。だから大勢の藤枝東卒業生は世界で必要だとされ、愛されているのだと思う。私自身も留学時代に知り合ったヴェネズエラ人女性から愛され、結婚し、今に至る。



音楽部と水泳部 松永 宏 (26回)

私共昭和9年生まれにとって、学校制度の変遷は不思議とついて回ってきた。昭和16年小学校入学生は国民学校に代わって6年間、旧制中学進学を目指していたが、戦後の制度変更で中学義務化、高校進学は、学区制で静岡は工業科が進学でき、普通科進学は藤枝高校、商業は島田商業となりました。昭和27年春の、甲子園の選抜大会で優勝した。

昭和16年小学校入学生は国民学校に代わって6年間、旧制中学進学を目指していたが、戦後の制度変更で中学義務化、高校進学は、学区制で静岡は工業科が進学でき、普通科進学は藤枝高校、商業は島田商業となりました。昭和27年春の、甲子園の選抜大会で優勝した。

昭和16年小学校入学生は国民学校に代わって6年間、旧制中学進学を目指していたが、戦後の制度変更で中学義務化、高校進学は、学区制で静岡は工業科が進学でき、普通科進学は藤枝高校、商業は島田商業となりました。昭和27年春の、甲子園の選抜大会で優勝した。

昭和16年小学校入学生は国民学校に代わって6年間、旧制中学進学を目指していたが、戦後の制度変更で中学義務化、高校進学は、学区制で静岡は工業科が進学でき、普通科進学は藤枝高校、商業は島田商業となりました。昭和27年春の、甲子園の選抜大会で優勝した。

昭和16年小学校入学生は国民学校に代わって6年間、旧制中学進学を目指していたが、戦後の制度変更で中学義務化、高校進学は、学区制で静岡は工業科が進学でき、普通科進学は藤枝高校、商業は島田商業となりました。昭和27年春の、甲子園の選抜大会で優勝した。



昭和27年 藤枝東高校音楽部 第1回演奏会

昭和16年小学校入学生は国民学校に代わって6年間、旧制中学進学を目指していたが、戦後の制度変更で中学義務化、高校進学は、学区制で静岡は工業科が進学でき、普通科進学は藤枝高校、商業は島田商業となりました。昭和27年春の、甲子園の選抜大会で優勝した。

昭和16年小学校入学生は国民学校に代わって6年間、旧制中学進学を目指していたが、戦後の制度変更で中学義務化、高校進学は、学区制で静岡は工業科が進学でき、普通科進学は藤枝高校、商業は島田商業となりました。昭和27年春の、甲子園の選抜大会で優勝した。

恩師を訪ねて 桜井 賢雄先生 (20回)

昭和27年4月~59年3月在籍

青大将といっても、加山雄三主演の映画「青大将」シリーズで田中邦衛演じる青大将のことではない。東高同窓生にとつての青大将といえは、今回登場した恩師、桜井賢雄先生にほかならない。フルネームも、担当授業が日本史と社会であったことも、失礼ながら失念してしまつたとしても、「青大将」と聞けば、教え子なら誰もが教壇に立っていた姿を思い浮かべることができるといって、青大将先生」の存在は教え子たちの胸に強く刻まれているのだ。

こんなことがあった。昭和30年代末の日本史の授業のこと。教室に入ると、黒板前の教師用机に置かれた学帽に気付いた。手に取ってみると、死んだヘビが。だが「ヘビか」と一言つぶやき、平靜に授業を始めた。生徒たちはどうだ、たか。脱帽し、敬愛のまなざしで「青大将先生」を見つめ直した。そしてその場に居た一人は、い。

恩師であるだけでなく、同窓生でもある。在籍したのは終戦を挟んだ志太中時代。学徒動員も経験した。過酷な環境の下、現静岡市清水区の工場を連日、汗を流した。卒業は昭和22年。実家は藤枝市藤枝3丁目の西光寺で、「寺の跡取り」だったことから、仏教学部のある正大に進んだ。ここで、教員免許を取得し、郷里に戻って教師の道に。最初の赴任校は相良高。1年間、藤枝市の自宅から軽便鉄道で通勤し、1年後の27年、母校・東高に転じた。以来、59年に藤原高に移るまで在職した。

戦後の復興期から、高度成長期、さらにバブル期と、母校の教壇に立ち続けた32年間に社会情勢は大きく変遷した。しかし、「東高の生徒たちはいつも余裕があり、それはいつの時代も変わらなかった」と振り返る。青大将先生の指導する「余裕」こそが、同窓の多くが感じてきた「東高のおおらかさ」の源泉、と受け止めた。日々の勤めに打ち込んでいる。

(会報委員・K)



境(山本)千鶴子先生に感謝 山下内科病院院長 山下えり子 (53回)

「山本先生、私、東高に行きたいんです。」 昭和51年の晩春、静岡F学園中学校の階段を降りながら、中3北組担任の山本先生に告げました。山本先生は東高卒業生の英語の教師でした。「わかりました。」というお言葉に、否定されるであらうと思っていた私は驚きました。小学生時代に近くの中学校で学ばれた東高のサッカーの試合を偶然観て魅了されました。中学1年生の秋に千鶴院行き、東高で高校時代を過ごしたいと思いましたが、両親には医学部に進学し父の後を継ぎ内科になる事を約束し、東高に進学出来ないのなら、5階の教室のベンチから飛び降りると話しました。